

論 説

エスニックビジネス経営者の言語管理とエンパワメント
——高田馬場界隈のビルマレストランを事例として^{1,2)}——

猿 橋 順 子*

はじめに

移民に対する言語支援は、移民が広範かつ歴史的な居住域を持たないこと、居住期間が流動的であること、市民権や発言力の面で弱い立場に置かれがちであることなどから優先順位の最後尾に列せられることが少なくなかった。ところが昨今では、移民の世界規模での広がりや汎用可能な言語的人権の追求、言語多様性の価値への再認識などが相まって、移民をめぐる言語の問題にも関心が寄せられるようになってきている³⁾。ただし、その多くは弱者救済的な視点に立つもので占められている。たとえば移民の子どものマジョリティ言語へのアク

* 青山学院大学国際政治経済学部准教授

- 1) 本研究は日本学術振興会の科学研究費補助金(基盤研究 C22520441)を受けて取り組んだ研究成果の一部である。
- 2) 1989年にビルマの軍事政権は、対外向けの英語表記を「Burma」から「Myanmar」に変更すると宣言した。しかし軍事政権に反対の立場を取る研究者の多くは引き続き「Burma/ビルマ」を用いている(根本敬『抵抗と協力のはざま: 近代ビルマ史のなかのイギリスと日本』(岩波書店, 2010年)16頁)。本論ではThe Center for Applied Linguistics発行のDonald A. Ranard and Sandy Barron (Eds.), "Refugees from Burma: Their backgrounds and refugee experiences," 2007, (Retrieved June 30, 2012 from; <http://www.cal.org/co/pdf/files/refugeesfromburma.pdf>)に依拠し、国名を「ビルマ」、国民は「ビルマ人」、民族については「ビルマ民族」と表記する。インタビューでは「ビルマ」と「ミャンマー」が錯綜しているが、語りのまま掲載し、混乱を招くと思われる箇所のみ注を入れた。
- 3) たとえば社会的に弱い言語から強い言語に乗り換える言語移行の転換を模索する諸研究を収録したJoshua A. Fishman (Ed.), *Can threatened languages be saved? Reversing language shift, revisited: A 21st century perspective*, Clevedon: Multilingual Matters, 1991. は各セクションに移民のテーマを含んでいる。

セス、医療や災害時など緊急事態における多言語情報提供といった課題などがある。

言語的弱者への言語支援を実現することと等しく重要なテーマがエンパワメントの側面である。エンパワメントという概念自体多義的であるが、ここでは「当事者が自分のやっていることは社会に対して意味があるという確信」や「自分は自分の人生をコントロールしているという感覚」をもち「やればできるという自己効力感 (self-efficacy) を持って日々を送ること」とする⁴⁾。

移民は生活基盤が変わることにまつわるさまざまな困難に直面するわけだが、言語について言えば、単に彼らを取りまく主流派言語が変わるだけではなく、言語に付随するあらゆる社会規範、コミュニケーションスタイル、行動様式を学びとる必要に迫られる。出身国で当たり前であった言語・コミュニケーション規範のうち、何が通用し、何が異質と受取られるかを見分けると同時に、何を自分らしさとして保ち、何を新たに学び取るかは、個々のアイデンティティとも関わる⁵⁾。しかし、彼らのなかには移住先の言語と行動様式を一日も早く身につけなくてはいけないというプレッシャーから、自ら選択するというコントロールの感覚を持ってなくなる人も少なくない。

ここで視点を変え、移民が言語・コミュニケーションの面でエンパワメントを実現している領域はどこにあるかを考えてみたい。ペート・バックハウスは東京とカナダのケベックの言語景観の比較研究で、それが「日本語の安定した地位ゆえ」であるとしながらも、東京という都市が他言語の侵入に相対的に寛容であると結論づけている⁶⁾。確かに、東京には比較的ゆるやかに特定の国籍

4) Emilia E. Martinex-Brawley and Paz M-B. Zorita, "Language, identity and empowerment," *Journal of Ethnic and Cultural Diversity in Social Work*. 15: 1-2, 2006, pp. 81-95, p. 87.

5) Haya Itzhaky, "Developing empowerment and leadership: The case of immigrant women in Israel," *AFFILIA: Journal of Women and Social Work*, 18-3, 2003, pp. 289-301.

6) Peter Backhaus, "Rules and regulations in linguistic landscaping: A comparative perspective," In Elana Shohamy and Durk Gorter (Eds.), *Linguistic landscape: Expanding the scenery*, NY: Routledge. 2009, pp. 157-172, p. 167.

の人々が集まる街があり、そこが日本人にとっても異文化や異国情緒を楽しむエスニックタウンとして広く知られていたりする。そこには移住者と日本人の両方をターゲットとするエスニックビジネスが展開されている。エスニックビジネスは移住者にとって新たな雇用を生み出し、「数少ない社会的上昇の経路」となるという⁷⁾。「エスニック起業家」のなかには、エスニックコミュニティの代表として人々をまとめたり、日本社会とエスニックコミュニティの間を仲介し、問題解決に寄与する役割も担う場合もあるとの指摘もある。

なかでも出身国の料理を提供するエスニックレストランはエスニックタウンが形成される基盤とも言われている⁸⁾。そこで本論では、東京都豊島区の高田馬場駅周辺に緩やかに点在しているビルマレストランを事例とし、特に言語管理と言語景観の視点から、エンパワメントの諸相がどのように当事者の語りに表れるかを明らかにすることを試みる。

1. 在日ビルマ人の概要

1-1 ビルマの少数民族と言語

在日ビルマ人の現状を把握する上で、ビルマという国について基本的な理解が必要である。ビルマは多民族・多言語国家で、『*Ethnologue: Languages of the world* 第16版』によると、ビルマに現存する言語は111種類とある⁹⁾。国土は7つの管区と7つの州から成り、州はビルマを構成する主要な民族を単位に分けられたとされている。実際の民族および言語区分ははるかに多様でビルマ政府は135の民族を認めている。ただし、こうした区分は必ずしも民族自身の認識とは一致せず、実際の文化的・社会的・言語的な複雑系は文化人類学者や言語人類学者の関心を惹きつけてやまない。同時にそれらの研究が明らかにしたことは、彼らの言語的な分布は必ずしも文化や宗教、地勢、社会システムなど

7) 樋口直人「エスニック・ビジネス」真田信治／庄司博史編『日本の多言語社会』（岩波書店 2005年）173-174頁

8) 稲葉佳子『オオクボ 都市の力：多文化空間のダイナミズム』（学芸出版社 2008年）93頁

9) <http://www.ethnologue.com/web.asp>（最終アクセス 2012年9月1日）

の境界線と一致せず、何をもって共同体とみるかによって描かれる境界は異なるということであった¹⁰⁾。

民族間の衝突や支配といった勢力関係は植民地期以前の王朝時代から存在したが¹¹⁾、イギリスによる植民地支配期および日本軍による占領期¹²⁾には、イギリスや日本との結びつきに応じて、より複雑で熾烈な民族間の対立を引き起こした。この時代から首都ラングーン¹³⁾では、反植民地主義のシンボルとしてビルマ語浄化運動が展開されるなどナショナリズムと言語の関係が密接になっていった¹⁴⁾。

1948年に主権国家としてイギリスから完全に独立するが、政権は安定したものではなかった。1962年にネイウィン率いる国軍が軍事クーデターを起こし、以来1988年までにわたる「ビルマ式社会主義」の時代となる。1988年には学生らを中心に民主化運動が大規模化するが、国軍により鎮圧され軍事政権色はさらに強まることとなる。その後、民主化運動のリーダーであるアウンサンスーチー氏が自宅軟禁されるなど「閉ざされた国」のイメージが強まった。ここ数年は、2010年にアウンサンスーチー氏が解放されるなど、ビルマの民主化路線が国際社会の注目を集めている。

このように独立以来、ビルマの政局にはいくつかの転換点があったが、ビルマ政府はビルマ族以外の少数民族に対し、一貫した同化政策を展開してきた。言語についても同様で、ネイウィン政権時代には学校教育をビルマ語で行うことが徹底され、諸民族の言語は教授言語だけでなく教科言語としても排除されていった。1974年に公布された憲法には「言論、集会、言語、教育および宗教

10) Edmund R. Leach, *Political systems of Highland Burma*, London: The Athlone Press, 1970. (関本照夫訳『高地ビルマの政治体系』弘文堂)

11) 詳しくは伊東利勝編『ミャンマー概説』(めこん 2010年) 89-105頁

12) 1942年6月から1945年8月まで。この時期に日本がビルマに及ぼした影響については根本敬(前掲書)を参照のこと。

13) 1989年の政府による国名変更の際(注2参照)、ラングーンもヤンゴンに改められた。現在の首都はネピドー。

14) Mary, P. Callahan, "Language policy in modern Burma," In Michael E. Brown and Sumit Ganguly (Eds.), *Fighting words: Language policy and ethnic relations in Asia*, Cambridge: The MIT Press, 2003, p. 152.

の自由を保障する」との文言が明記されているが、これは公然と無視されているという¹⁵⁾。特に1988年の民主化運動の鎮圧以降、ビルマ族以外の周辺諸民族に対する同化と無力化 (disempowerment) の圧力は強まり、私的な民族教育に対する取り締まりや教員の逮捕などが報告されている。言語や宗教、文化面の抑圧以上に、強制労働、強制移住、略奪、強姦など深刻な人権侵害もあり、タイをはじめとする国境地帯には50万人以上の難民がキャンプでの生活を余儀なくされている¹⁶⁾。

このように少数民族の立場から見ると、身体的・精神的苦痛を与えられ続けているわけだが、メアリー・キャラハンは植民地支配からの独立以来、政府の懸案事項は主にビルマ族で構成される首都内部の対抗勢力をどう抑えるかであり、周縁の少数民族の諸問題は相対的に軽視されてきたと指摘する¹⁷⁾。特に少数民族言語について政府は、言語教育の禁止、新聞の発行や出版の禁止、民族名のビルマ語化など具体的な抑圧政策を展開してきたが、一貫して少数言語をビルマ語より劣る存在とみなし、発展や近代化に伴いやがてはビルマ語への言語移行が進むものと楽観視してきた。言語の多様性を重要な政治的課題とまではみなさない傾向は国民民主連盟 (NLD) にも共通しており¹⁸⁾、近年の民主化への動きについても国境付近では首都周辺ほどに期待感の高揚は見られず、むしろ冷静に見守るにとどまっている状況にある。

1-2 在日ビルマ人の増加とエスニックコミュニティの形成

こうしたビルマ本国の状況は、日本で暮らすビルマ人の様相に直接の影響を与えている。日本で住民登録をするビルマ人の数は、1980年代前半までは100人代で推移してきたが、1980年代後半から飛躍的に増加し、1990年には1,221

15) Martin Smith, *Ethnic groups in Burma: Development, democracy and human rights*. London: Anti-Slavery International, 1994. (高橋雄一郎訳『ビルマの少数民族: 開発、民主主義、そして人権』明石書店, 162頁)

16) Donald A. Ranard and Sandy Barron (Eds.), *Ibid.*, p. 1.

17) *Ibid.* p. 173.

18) *Ibid.* p. 175. この点についてキャラハンはマーティン・スミスを引用しつつ指摘している。

人となる¹⁹⁾。その後も増加を続け、2010年には8,577人にのぼっている。同年の在日外国人の総数は2,134,151人で、ビルマ人はその0.4%を構成するに過ぎない。しかし在日ビルマ人の14.4%にあたる1,236人が東京都新宿区に、11%にあたる940人が豊島区に在住している²⁰⁾。両区の境界上にある高田馬場駅周辺は「リトルヤンゴン」とも呼ばれる集住地域となっているのである。とはいえ地域全体で考えれば多数派とは言えず、エスニックビジネスも高田馬場駅を中心に放射線状に散在しており、緩やかな集住コミュニティを形成しているのを見ることが妥当である。

在日ビルマ人の民族構成についての統計は存在しないが、前述のようなビルマの政治状況を反映し、在日ビルマ人コミュニティは、主に都市部出身のビルマ族と、国境近くに暮らしていた少数民族とで形成されている。依然、日本の難民認定の道は開かれているとは言いがたい。2011年の難民認定申請者数は1,867人で、そのうち491人がビルマ人であった。うち難民認定されたのは18人である²¹⁾。難民申請を認められなかった者のなかには、本国に帰ることもできず超過滞在者とならざるを得ない人もいる。もちろん在日ビルマ人のなかには、政治的に困難な状況に置かれた人だけではなく、1988年以前から在日ビルマ人の中心であった留学生や研修生、企業内転勤などで日本に暮らすビルマ人もいる。日本人と結婚し定住している人もいれば日本国籍を取得した人もいることを忘れてはならない。

19) 法務省「出入国管理統計」 http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_nyukan.html (最終アクセス日 2012年9月1日)

20) 新宿区「外国人登録者数国籍別一覧表」2012年、<http://www.city.shinjuku.lg.jp/content/000107125.pdf> (最終アクセス 2012年5月11日)、豊島区「外国人登録者数・上位20国籍別」2011年、<http://www.city.toshima.lg.jp/kusei/toukei/18326/018328.html> (最終アクセス 2012年5月11日)

21) 2011年は日本の難民認定制度発足から30年にあたる節目の年でもあったが、この30年間で国内における難民認定者数の総数は598人で、ビルマ人が最も多く307人となっている。法務省入国管理局「報道発表資料」 http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri03_00085.html (最終アクセス 2012年9月1日)

1-3 在日ビルマ人コミュニティ内のエスニックビジネス

このような流れにより、高田馬場駅周辺には1990年代以降、ビルマ人が集まるエスニックコミュニティが形成されていった。そこに付随するエスニックビジネスは同国人を顧客とするビジネスと、同国人と日本人双方を対象とするビジネスに大別できそうである。食材だけでなく雑誌や書籍、音楽CDや衣類など生活に必要なあらゆる物品を販売する雑貨店、結婚式など特別な日に欠かせない美容院、旅行代理店などは主に同国人を顧客としている。雑居ビルの一室に店舗を構えているのだが、通りや窓に看板はなく、ビルマ人からの情報がなければ見つけることも難しい。対照的に日本人も顧客とするのがレストランや居酒屋などの飲食業である。これらの店舗の看板やメニューにはビルマの民族言語と日本語とが併記されている。全員でなくとも従業員の何人かは日本語での接客に慣れている。

ビルマレストランには昼間のランチ営業と夕方からのディナー営業の両方をする店と、夜の営業のみの店舗がある²²⁾。調査をしていて明らかになったことだが、ランチ営業をしている店はビルマ人客と同じくらい日本人の客層を取り込んでいる。高田馬場界隈に暮らすビルマ人は、昼間は仕事で高田馬場以外の場所に働きに出ていることが多い。また高田馬場は郊外に比べ地価が高いこと、来日から数年が経ち日本での暮らしに慣れてきたこと、結婚や出産により家族の人数が増え広い住まいが必要となることなどから、郊外に移り住むビルマ人も多くなってきた。そこで、ビルマ人の多くは仕事を終えた夜や、週末に高田馬場のビルマレストランに集まり、近況を報告し合ったり、心配事を相談したり、祖国の歌を歌ったりしながら故郷の味を味わうのである。

このような事情で、ランチタイムを利用するのは高田馬場界隈に仕事をもつ日本人が中心となる。ランチ営業をするビルマレストランはいずれも飲食店が立ち並ぶ繁華街にある。ラーメン屋や回転寿司店、ファミリーレストラン、中華料理店、タイやインドなどのエスニックレストランに隣接ししのぎを削って

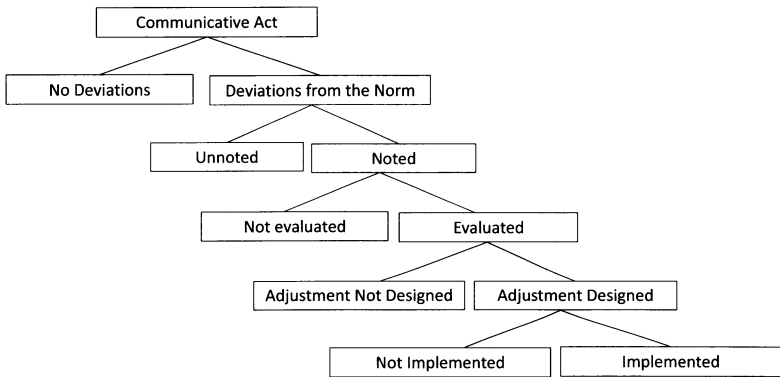
22) 本調査期間中にアクセスできたレストランは10店舗で、うち6店舗がランチおよびディナー営業をしており、4店舗は夜の営業のみであった。

いる。日本人のなかには通りがかりにビルマレストランに入り、以来ビルマ料理のファンとなって週に1,2回定期的にお昼を食べに訪れる人もいれば、会社の歓送迎会などの場所として利用したことをきっかけに常連客となる人もいる。インターネットも日本人集客の重要な媒体となっている。

2. 言語管理と言語景観：エンパワメントの視点から

2-1 言語管理とエンパワメント

社会言語学者のネウストプニーは、従来の言語政策研究が国家や政府の行為に関心を寄せすぎている側面を批判し、具体的な異言語話者の接触場面で個人が行う「対処」を分析する枠組みとして言語管理理論を提唱した²³⁾。個人レベルの言語管理の基本的なプロセスは以下のように示される。



言語管理プロセスの枠組み²⁴⁾

コミュニケーション行為を行う個人は主観的に、帰属するコミュニティや、即興的な接触場面に通用する規範を持っている。それに照らして逸脱が起きて

23) J. V. ネウストプニー「言語管理とコミュニティ言語の諸問題」古川ちかし編『多言語・多文化コミュニティのための言語管理』（国立国語研究所 1997年）23頁

24) Jiri Nekvapil, “The integrative potential of language management theory,” In Jiri Nekvapil and Tamah Sherman (Eds.), *Language management in contact situations: Perspectives from three continents*, Frankfurt: Peterlang, 2009, p. 3.

いると気づき、評価し、調整を計画し、実行するという一連の過程が言語管理である。各段階に中断される可能性がある。そのためコミュニケーション行為の現象面を見ただけでは言語管理の内実はつかめない。コミュニケーション行為の当事者の主観に注目することが言語管理研究の特徴ともいえよう。具体的には、コミュニケーション行為とそれについて当事者に振り返りを促すフォローアップインタビューの2つのデータを分析する。また権威的な存在を中心に据えた言語政策研究を批判する形で言語管理理論を提示したネウストプニーは、このプロセスの分析が単に言語レベルに終始してはならないと主張する²⁵⁾。言語管理は言語レベルに加えて、社会言語学的／コミュニケーションのレベル、社会文化的／社会経済的レベルの分析を含むことではじめて「効果的な結果」が得られるとしている。

またその後の研究で、言語管理理論は集団や企業など、組織的な言語管理にも応用されるようになった²⁶⁾。その際にも重要な点は、組織の上層部から見た言語・コミュニケーション上の問題ではなく、日々のコミュニケーション活動の中で直面する言語問題への気づきを起点とし、そこから問題を解決するための方策が検討されていくボトムアップの過程に注目する。本論では、この言語管理の視点を援用し、エスニックレストランを運営していく日常のなかで、店主がどのような言語問題に気づき、それについて対処をしているか(いないか)といったプロセスに注目する。その際、エンパワメントもしくはディスエンパワメントのいずれを含む語りとして捉えられるのかに注意を払いながら考察する²⁷⁾。すなわち、語りの内容だけでなく、語られ方にも注目するということがある。

25) 前掲書, p. 27.

26) たとえば Jiri Nekvapil and Marek Nekula, "On language management in multinational companies in the Czech Republic," *Current issues in language planning* 7: 2-3, 2006.

27) 上記の多国籍企業の研究において、Nekvapilらは言語管理の「評価」の段階が肯定的であるか否定的であるかがその後の言語管理プロセスにも影響を及ぼすことを指摘している。

2-2 言語景観とエンパワメント

当初、言語管理理論は接触場面のコミュニケーション行為、すなわち自然発話を研究対象とすることを前提に発展した。本研究ではレストランの存在を地域コミュニティに表出する媒体である看板やメニューなどの書き言葉も対象に含む。その際に拠り所とするのが言語景観研究である。

言語景観は不特定多数の人々が行き来する通りや、だれもが利用できるオープンな空間に提示される言語の種類や内容を分析するものである。言語景観研究も言語政策研究を補完することを視野に入れ、我々の身の周りにある書き言葉が、地域社会の言語使用の現実の一面を映し出しているという前提に立って取り組まれる。特に都市の多言語化という複雑系を扱う手法として注目されている。特定地域の言語マイノリティの活力や、当該地域が備える多言語への寛容度など、パワーの問題を分析することを主眼において提唱された背景をもつ²⁸⁾。その後、言語景観研究のすそ野は広がり、ベンラファエルらはこの研究分野が、①多言語間のパワー関係だけでなく、②効果的なコミュニケーション戦略を見出したり、③メッセージに対する主観的意味の相違やそれにまつわる交渉や調整の過程を明らかにしたり、③言語提示を通して構築される集団的アイデンティティの発展過程を描き出すことに貢献すると指摘している²⁹⁾。

本稿の調査事例である在日ビルマ人が経営するビルマレストランについても、日本語社会のなかにビルマ語やその他の民族言語がどう参加しているかという言語間のパワーを推し量る上で看板や掲示物を分析することが有益であると考える。また、それにまつわる提示者(店主)の主観的な意味はどのようなのか、そこにはエンパワメントの諸相が見られるのか、あるいは反対に在日ビル

28) たとえば Rodrigue Landry and Richard Y. Landry, "Linguistic landscape and ethnolinguistic vitality: An empirical study," *Journal of Language and Social Psychology* 16, 1997, pp. 23-49, は言語景観研究をひとつの研究領域として確立させた研究成果としてしばしば引用される。

29) Barron S. Ben-Rafael, Elana Shohamy, and Monica Barni, "Introduction: An approach to an 'Ordered Disorder'," In Elana Shohamy, Barron S. Ben-Rafael and Monica Barni (Eds.), *Linguistic Landscape in the City*, NY: Multilingual Matters, 2010 p. xix.

マ人を無力化する作用を伴っているのかという問題に迫ることとする。

3. 調査概要

上記を踏まえ、本研究の研究設問を改めて整理する。

東京都豊島区および新宿区の区界に位置する高田馬場駅周辺の商店街に分布する在日ビルマ人レストランにおけるレストラン経営者の言語管理と、それをめぐる語りにおいて、どのような面でエンパワメント（あるいはディスエンパワメント）との結びつきがみられるかを明らかにすることを試みる。

実地調査は言語景観研究および言語管理理論の手法を組み合わせ、以下の手順で実施した。

調査手順：

1. レストランの外に掲示されている書き言葉（看板や案内、広告など）の画像を収集
2. 店主に研究の主旨を伝え調査協力の承諾を得たうえで、レストラン内に掲示されている書き言葉（案内やメニュー、ポスターや絵画などの装飾品も含む）の画像を収集
3. 客として来店し、参与観察を実施³⁰⁾、フィールドノートを作成
4. 上記（1～3）のデータを分析した上で、言語管理が行われていると予測されるデータに基づきインタビューフローを作成、店主に対しフォーカスインタビューを実施³¹⁾
5. 必要に応じて追加の参与観察、インタビューを実施

調査対象は、ビルマ人と日本人両方を客層とする傾向の強いランチ営業を行っ

30) 言語管理研究では自然発話を録音・録画することを推奨しているが、店主や従業員に調査承諾を得られても、来店する客に調査協力依頼をすることはレストラン側に不利益をもたらす危険性が予測されるため、筆記記録を作成する参与観察の形を取らざるを得なかった。

31) インタビューは前半をレストラン運営の経緯について尋ね、後半に言語管理に焦点をあてた聞き取りを行った。

ている店舗に限定した。調査の期間は2012年2月から7月で、調査参加レストランの概要は以下のとおりである（6店舗中5店舗が参加）。

ID	店舗名	開業	民族	経営の現状	調査協力者の言語
A	ミンガラバー	1997	ビルマ	オーナーがアメリカへ渡ったためその妹夫婦が二人で経営	ビルマ語, 日本語
B	ノングインレイ	1998	シャン	シャン人二人で共同経営	シャン語, ビルマ語, 日本語, ラオス語, タイ語, 英語
C	ルビー	2002	ビルマ	開業時は5人の共同経営だったが今は夫婦二人で経営	ビルマ語, 日本語, 英語
D	マリカ	2007	カチン	以前もビルマレストランだった場所を引き継ぐ, 個人経営	カチン語 ³²⁾ , ビルマ語, 日本語, 英語
E	マイソーカー	2008	シャン	個人経営, Bの店主が経営の助言や支援をしている	シャン語, ビルマ語, 日本語, タイ語

4. 分析

4-1 レストラン名の名づけをめぐる言語管理とエンパワメント

レストランを開業する上で、最初の重要な言語面の意思決定が店名の決定である。店名の決定には故郷への愛着や誇り、日本社会への思い、言語文化上の慣例からの検討、言語選択、関係者間の意見の調整などと絡めた語りが聞かれた。これらの要素が、エンパワメントの感覚とどう結びついているのかに着目しながら、実際の語りを見ていきたい。まずビルマ民族のレストラン店主のCさんは次のように語った。

- C レストランの名前はみんなで考えた、最初、国に関係のある名前をつけた方がいいということで、何があるかなーと考えたらね、国では宝石がいっぱい出ているのね、あの Gold, 「Golden Burma」って呼ばれるくら

32) ジンポー語ともいう。中国のジンポー族、ビルマのカチン族にまたがって分布。ここではインタビューの発話にならない「カチン語」と表記する。

い、それで世界で一番有名な、一番高いルビーがビルマで出た歴史があるから、「ルビー」にしようかね、あと色々、「お米」とかね、あと木、はあ、高い木で、名前分からないけど……

* ビルマ語でもいいですよ

C ビルマ語で？ あははは、ビルマ語で？ なん、チョンテ？ お米とかライスとかいう意味ね、あと、あと「アザベー」、ジャスミンのことビルマ語で「アザベー」ね、でもビルマ語で言ったら日本人分からないでしょ、だから英語の「ルビー」がいいねって、ビルマ語では(ルビーは)「プレミアー」だから

レストランの名前をつける際、故郷のビルマが世界に誇れるものは何かということが検討されたと言う。エスニックレストランでは民族言語をそのまま用いる店も少なくないが、Cさんの場合、ビルマ語名は候補から外されたとのことである。語りのなかでビルマに特有の「高い木」の名前が思い出せない様子にインタビュアーが「ビルマ語でもいいですよ」と促したところ、ビルマ語を発話する前に恥ずかしそうな表情で笑う様子が見られ、「ビルマ語で？」と繰り返し確認した上で、思い切った様子で「チョンテ？」と語尾を上げ気味に発話していた。この様子からもCさんが日本社会でビルマ語を使うことに躊躇があることが伺える。その理由として、日本人が「分かる」ことが優先されると述べ、ゆえに「英語」の語彙を選択した(ルビーは日本語でも「ルビー」なのだが)と説明している。

対照的に日本人にもビルマ人にも分からなくても、敢えて民族の言語で名づけをしたという店もあった。カチン民族が経営する「マリカ」では、レストランの名前を通じて、故郷のことを広く知ってもらいたいという強い信念が表明された。

D マリカってというのは、どうしてもカチン民族のこのアヤラワディ (Ayer-waddy) 川の部分をみんなに知ってもらいたかったんですね、マリカってカチン民族の読み方です、ビルマの人は分からない、マリカってというのは、ンマイカ (Mayhka)、マリカ (Malihka) という二つの小さい川がつながって、アヤラワディになるわけですよ、でも僕たち(カチン)民族はつながっても関係なくて、カチン州のパモー (Bhamo) までは全部マリカって呼ぶんです、マリカってというのは水が流れてくる、この水ってい

うのはミャンマー全体が川の水を飲む習慣、農業もたくさんやってる、だからマリカって名前をつければ、みんなのためっていう意味になるねって、みんなで相談したんです、十何名くらい仲間を集めて、協力してくれた日本の方も参加して

* マリカは観光地でもあるんですか？

D 昔は観光地だったんですよ、それが今は危ない土地になっちゃったんです

* どうして？

D どうしてって言うか……あのう……中国の計画で、今は(マリカとンマイカの)間の島がなくなっちゃったんですよ、そこは思い出の写真しかないわけ、そこは今、緑がなくなっちゃって、大きなダムを作っちゃっている最中なんです

* じゃあ、ここ(店内に貼ってあるポスター)に見える景色は今はない？

D 完全になくなっちゃってる、それで、この前、新しい大統領³³⁾がダム建設を中止して中国ともめたんですね、それでカチン民族には独立軍というのがあるんですよ、その軍隊とミャンマー政府が今、戦っている最中なので危ない、まず外国人は全然だめ……昔はよく行ってたんです、だからその部分をどうしても伝えたかった

レストラン「マリカ」の店内に入ると、一番目立つところに風光明媚なマリカ川の風景写真が貼ってある。この写真に但し書きはついていないため、店員に聞かない限り、店名と風景を結びつけることはできないだろう。カチン民族のオーナーは、日本人のみならずビルマ民族(より正確にはカチン民族以外のビルマ人)に「分からなくても」その名とカチン語での表記にこだわりたいと言う。インタビューでは「マリカ」が持つ二つの対照的な意味合いが語られた。ひとつはマリカ川が湛える豊かな水がビルマ全体を潤すという「恵み」の意味である。もうひとつは、この美しい景観が破壊され、今も戦闘状態が続いている「カチン民族の苦しみ」を憂う側面である。前者は日本人も含め広く理解と共感を得た価値観として朗々と語られ、後者はためらいも伴いながら注意深く

33) 2011年に就任したテインセイン現大統領。

34) この語りではDさんが学齡児童期にビルマ民族の教師によってカチン民族としての民族名をはく奪されたという個人的なエピソードの語りも誘発した。

語られた³⁴⁾。それでも二つの語りのはじめと終りに「その部分を知ってもらいたい」「その部分を伝えたい」という訴えが表明されている。カチン語の「マリカ」という短い店名には、民族対立の悲劇と民族が分け隔てなく恵みを受用することへの価値づけという表裏一体の思いが象徴されているのである。そのメッセージ性の強さが、相手に伝わらないかもしれないというリスクを承知の上で、民族言語の使用を促していると考えられる。

続いてシャン民族レストラン B の店主の語りである。

* お店の名前は？

B インレイ湖

* それを決めたのはどうして？

B ああ、なんかミャンマーのレストランはみんなそうなんですけど、有名な地名をラングーンとかマンダレーとか、そういうの、みなさんやってくるから、我々のシャン州の中で一番有名なのはインレイ湖だから、すぐにノグインレイになりました、最初インレイだけにしようかと思ったんだけど、インレイだと二つの文字だと縁起が悪い、シャンではね、3つの文字が縁起がいい、で、前にノグ(湖)をつけて、ノグインレイに³⁵⁾

名づけにはビルマで広く行われる手法をシャン州にあてはめて選んだと言う。同時に、シャン語文化の慣習である「文字数による縁起の良し悪し」を考慮した経緯についても語られた。ビルマとシャン双方の言語文化上の習慣の動員は自然な様子で語られた。文字数へのこだわりは、もうひとつのシャン民族によるレストラン「マイソンカー」のオーナーの語りにもあらわれている。

E みんなで名前は何つけようかなあーって、シャン民族は3つの言葉が好きなんで、一人の友達がミャンマーのレストランはよく地名つけるけど、日本には「ミンガラバー」(ビルマ語で「こんにちは」)があるから、私たちも同じ場所だから「マイソンカー」(シャン語で「こんにちは」)がいいかなあーと

* ああ、駅の向こうに「ミンガラバー」で、駅のこっちに「マイソンカー」でいいですね

35) ビルマ語でインレイ湖は「インレイカン」となり語順が変わる。

E はいはい(笑いながら)意味は同じだから、ミャンマーの中でビルマ(民族)だけが大切にされてシャン民族はいつも大変、だから日本でレストランやるときは、ここはミャンマー料理じゃない、シャン民族の料理ってしたかった

Bさんの語りがビルマとシャン双方の習慣の参照が自然に語られたのに対し、Eさんは本国における民族差別と自分のレストランの名づけの関連を明白に指摘している。民族差別を受けたことへの反動として自身のレストランを位置づけているのである。同時に、ビルマでは「地名をレストラン名につける」習慣があることを踏まえつつ、在日ビルマ人レストランに「ミンガラバー」(ビルマ語で「こんにちは」)があることを拠り所に「マイソンカー」(シャン語で「こんにちは」)という名づけがなされたと言う。つまりシャン民族レストランとしての独自性を表現する際に、シャン、ビルマ、在日ビルマコミュニティのすべてが参照されているのである。

これらの語りから、レストランを開業する際の名づけは、各々が帰属意識をもつ国や民族への愛着や誇り、象徴を起点としつつも、ビルマやシャン、カチン、日本の言語文化上の習慣を広く参照して行われている様子が伺える。それは独断的ではなく、同国人の友人や支援者に加え日本人の賛同が得られたことも決定の根拠として言及される。興味深いのは少数民族の店主がビルマの言語文化と、シャン、カチンそれぞれの言語文化を引き合いに出す場合、両者は自然に相互参照され取り入れられるか、両立できない場合には少数民族の習慣が優先的に選択される点である。一方、ビルマ民族のレストランCでは、ビルマと日本の言語文化的習慣を参照した際に、日本側の論理を優先させ、ビルマ語使用を控える様子が見られた。この言語態度の違いは、少数民族は長きにわたる抑圧や差別のなかで、常に自分たちが表現する自由を希求し、その訴えを主張し続けてきたことと関係があるかもしれない。日本の地で、ビルマで引き続き抑圧を受けている同胞への憂いはあるものの、自由に民族の言語・文化の表現ができることは彼らが民族言語への誇りと自信を取り戻し、エンパワメントにプラスの効果をもたらしていると考えられるのではないだろうか。

4-2 看板・メニュー等の言語景観とエンパワメント

名づけたレストラン名を看板に表現したり、レストラン経営に直結するメニューを作成する際、言語面の意思決定や言語管理はさらに複雑になる。伝えたい情報を伝えたい相手に届けるためには、内容だけではなく言語の種類と表記法の選択がより重要となる。たとえば前述の、シャン語の文字で3文字になるようにした「ノングインレイ」の看板は、シャン文字ではなく、カタカナおよびビルマ文字となっている。その理由についてBさんは、シャン民族でも一定の世代以上はシャン文字の読み書きができないことを挙げた。すなわち看板・メニューの作成は、作成者およびターゲット集団のリテラシーの問題とも係わってくるのである。

レストランAではメニュー作成に複数の日本人が関与している様子が次のように語られた。

- A 今はお客さんの流れが悪いので自分達だけでやってますが、今までは日本人で大学でビルマ語、ミャンマー語を習っている学生がミャンマー語を勉強しながら手伝ってくれました
- * ああ、そうやって育ててもらった日本人もいるんですね
- A いえー、向こうに色んな助けをもらいながら、「メニューをお願いしますね」って書いてもらったり、これなんか(手書きのドリンクメニュー)はその人が書いてくれたものです
- * こちら(カラー印刷されたメニュー本体)の方は？
- A これは97年に作ったメニューです、でも私はパソコンができなくて、できる人に頼みます、それを商売までいかななくても、こういう書類いくらで作りますとか、メニューはいくらとかやっている人もいます、でもこのメニューは日本の、姉の娘の友達の父親が、タダで写真も撮ってくれて作ってくれました、だから文字はミャンマー語じゃなくて英語と日本語
- * でも、じゃあその人はビルマ語のこういう(メニューにカタカナ表記してある)発音とか少しできる？
- A できないです、だから私たちが発音してみて、カタカナでこうじゃないかってひとつひとつ書いてみてそれをパソコンに入れて作ってくれた、メニューはいつも日本人任せなんです

ビルマ語を学びながらアルバイトをする大学生に、店主は「助けてもらった」と言い、その具体的内容はメニュー作成であると言う。手書きのメニューには「SOFT DRINK」というタイトルの下に英語、日本語、ビルマ語で名称が並び価格が記載されている。「タマリンド」や「仙草(ジュース)」は中国や東南アジアでは一般的でも日本では理解されにくいだろう。しかしいずれも直訳を羅列してあるだけで、補足説明などはない。

メニュー本体についても「日本人任せ」であったと振り返る。その理由には日本語の問題だけでなく、パソコンスキルがないこと、無料で作成を申し出てくれた日本人がいたことが語られた。このメニューには、料理名(ビルマ語)のカタカナ表記、ローマ字表記に加え日本語と英語での説明がそれぞれの文化的文脈に沿う形で示されている³⁶⁾。写真も掲載されて料理のイメージが湧きやすい作りになっている。しかしこのメニューについて店主は日本語や英語でどう表現されているかといった内容面を知らずに20年近く使い続けているという。

仮に手書きのドリンクメニューの記載を、アルバイトの日本人大学生がすべてしたとしても、ビルマ語表記については確認や添削を受けたであろう。メニュー本体については、作成を申し出た日本人が「ビルマ語ができない」ために、ひとつひとつの発音をカタカナ表記に調整していったという。すなわち、いずれのメニュー作成場面にも共同作業が伺えるのだが、店主自身は「日本人任せ」と自己効力感が制約された調子で語っているのである。

レストランCの看板も日本人の支援者が「タダで」作成してくれたという。それゆえにビルマ語表記が一切ないのだが、それが実際の言語問題を引き起こしている様子が語られた。

- C 看板にビルマ語入ってないから、「どうしてビルマの文字入ってないんだよー、探すの大変だったー」ってみんな言ってる、最初、日本人にミャンマー料理を紹介しようと思って(レストランを)始めたから(ビルマ文字が)入ってなかった、こっちの看板(可動式の立て看板)も日本人でこ

36) たとえば「ガーベージュ」は日本語では「ミャンマー風さつま揚げ」と訳され、英語では「Fried fish cake」とし、含まれる野菜の種類を示している。

ういうの得意な人がタダで作ってくれたんで日本語しか書いてない、「はいはい、やります(ビルマ語を入れます)」って言ってあとは時間がないからできない、主人も忙しいし、他の人に頼むこともできないので、だから私はこれくらい(A4サイズ)の紙にビルマ語で書いて貼ったの、ブレミアー(ルビー)、タウタウサイ、タウタウサイはレストランのことね、本当はね、ちゃんと看板にビルマ語入れて作り直したいけどね、なかなか時間もない、お金もない

このレストランの看板にはビルマを示すものが一切入っていない。その理由は「最初はビルマ料理だけでレストランをやる自信がなかった」からだと言う。レストランCに限らず、ビルマレストランの店主の、ビルマにいた時の職業は実に多彩である。新聞記者、教師、軍人、学生など、むしろ飲食業とは無縁だった人が少なくない。それが来日後、ラーメン屋、蕎麦屋、食堂、イタリア料理屋などで働くこととなり、そこでの経験を活かしてビルマレストランを開業しているのである。

レストランCの店主も「ビルマには私たちよりおいしいレストランがいくらでもある」ためにビルマ人が集まるレストランにするという目標は立てられなかった。ビルマ料理を知らない日本人なら集客できるのではと考えていたのである。しかし、実際には故郷の味を求めて、またビルマや日本の情報を得るために多くのビルマ人が集う場所となった。その際「ビルマ文字が看板に表示されていないから探すことができなかった」というのである。こうした問題に対し、店主は急ごしらえの張り紙を掲示した。これで当座の用は足したのだが、やはり「きちんとビルマ文字の入った看板を作り直したい」という思いがある。つまり潜在的に持っていたビルマやビルマ語への愛着や誇りが、ビルマ人の客からの要求が支えとなり、より積極的に「ビルマ文字を前面に出したい」という思いにつながっていったのである。ただしその欲求は時間的制約や経済的制約によって実現には至っていない。

シャンレストランEでもメニュー作成に日本人が参加した経緯が語られている。ただし、そこには「日本人任せ」といった受け身の姿勢は現れていない。

- * メニューに日本語の説明が結構くわしいですね
E 日本人で手伝ってくれる人が3,4人います、彼らはシャン語を勉強したい、彼達はタイ語をしゃべる、だから私がタイ語で料理を説明して、これは豆で、タレはこれです
- * ああ、じゃあ日本語は、その説明を聞いた日本人が？
E 作った、はい
- * じゃあこれ（メニューの上の行）はシャン語？
E シャン語です、それは僕が入れます
- * シャン語はシャン文字とローマ字表記がある？
E 本当はシャン文字だけ、でも学生とか英語知っている人はこっち（ローマ字）使う、簡単だから、シャン民族でも半分くらいかな、シャンの字を知っているのは、シャン州に住んでいれば家の中ではシャン語で話できるけど字はむずかしい

この語りを引き続き、タイ語とシャン語、シャン語とビルマ語の間の類似点と相違点へと話が展開していった。レストランEのメニューは、シャン語のローマ字表記、シャン文字表記、カタカナ表記、ビルマ文字表記、日本語での説明の5種類となっている。普通に考えれば、言語数や表記数が増えればその分スペースが割かれ、文字を小さくしたり情報量を減らさねばならなくなる。しかしEさんは色々な事情で言語能力が異なる人々に広く呼びかけることになるため言語数や表記数が増えることをマイナスには捉えていない。むしろEさんはシャン語コミュニティの現状や問題を把握した上で、シャン語の維持や普及につながるとして積極的に捉えているのである。協力した日本人についても「シャン語を習いたい」人達なので、あくまでも関係性は対等である。

これらの語りから、ビルマレストランにおいて看板やメニューを作成する段階では、特に日本語の書く力と、日本の食文化を知った上で日本人に分かるように翻訳する力といった言語能力の面から管理能力の欠如を感じる側面があることが明らかとなった。またこれらの書き言葉の管理においてはパソコンスキルや経済力も影響する。レストランCのように料理人としてのレベル認識が言語選択に影響を与えた事実も興味深い。ただしこの場合、同国人からの好意的

な反応によって自己効力感はずぐにプラスに転じた様子がうかがえた。

最も注目すべき点は、メニューを作成する際にビルマ語、シャン語をそれぞれ習いたいと思っている日本人の協力を得た経緯について、レストランAの店主は「日本人任せ」とコントロール感の欠如を表明し、レストランEの店主はむしろシャン語を広める機会として自己肯定的に捉えているという違いが見られた点である。この相違を生み出した背景について断定することはできないが当事者向けの言語維持活動とのかかわりが関係していそうである。高田馬場にはシャン民族の人々が立ち上げた「在日シャン民族文化協会」がある。主に日曜日に新宿消費生活センターの一室に集まっている。そこでは若い世代を対象にしたシャン語教室も開かれる。そこでの活動の後、マイソンカーに場所を移して食事や交流をするそうである。Eさんは「在日シャン民族文化協会」そのものの活動で中心的な役割を担っているわけではないが、活動後の交流場所を提供しているという意味で活動を間接的に担っているという気持ちを抱いている。つまりシャン語の維持・継承活動の意義を認め、その実践に係わっていることが、メニューの言語選択における主体的態度を生み出したと考えられる。

4-3 レストランに持ち込まれる言語問題の管理とエンパワメント

レストランの営業のなかで直面する言語問題としては、ビルマ人の客が持ち込む言語問題が主に語られた。店主の日本語力が十分でないことによる問題もないわけではないが、それはレストラン経営の経験と共に減少し解消していく問題であると言う。開業当初の思い出をDさんは次のように語った。

D 日本で最初、山椒が分からなかったんですよ、僕たちカチン民族は山椒は料理のメインです、これはたぶん日本にないと思って、どうしようってみんなに聞いてみるんだけど名前が分からないわけ、あと本当のビルマの人、下(南部)の人たちは全然山椒のこと知らない、山椒っていう言葉がミャンマー語にないんですね

* あ、ビルマ語自体がない？

D ないみたいです、みんな分からないと言う、じゃあ僕たちの読み方は中

国と似ているから、中国のお店でおいを嗅ぎながら探したんです、見つけたら山椒(という名前)だって分かったんです、それが昔難しかったんだけど今は大丈夫

このDさんの語りから「山椒」という食材の語彙をめぐって、国内の主流派言語であるビルマ語ではなく言語の地勢学的な距離感に頼ることで問題解決の糸口をつかんだプロセスを見ることができる。カチン語の「山椒」の対訳が見つけれられないということはカチン語の辞書が十分に編纂されていないことの証でもあり、それは少数言語の弱さでもある。しかしDさんの語りでは、カチン語の地位の低さを経験した出来事ではなく、自分たちで摸索しながら問題を解決し達成感すら感じた出来事であった。こうした問題はレストランの開業時に限られ、経験を積むことで解決していくと言う。むしろレストラン経営で直面する言語問題は、ビルマ人コミュニティの言語問題が中心となっていく。

C ここは店だから(相談したい人が)入りやすいね、家だと入って頼むのはなかなか難しい、店だとぱっと入って、「お兄さん、お姉さん、これお願いします、どういう手紙だか分からない」、「これ私に何か問題ある?」ビザがないとか、言葉の問題とか、仕事のプレッシャーとか、前もね、仕事で困っている時ね、ちょっと問題あったとき入ってきて、「お姉さん、こういう問題あったよー」って、その人は自分の話したいこと全部話す、私は聞く、主人は聞く、それでその人が楽になって帰る、そういう人はすごく多いの、だからそういう時ね、儲けないけど、主人とね「すごい良かったね」って、人を助ける、儲けないけど、そういう場所があるって大切なことでしょ?

ビルマレストランには在留資格などの制度上の問題から、職場のストレスなど心の問題まで、ありとあらゆる問題が持ち込まれている。言語の問題は、語りの中ではビルマ人が抱えるさまざまな問題の一部を形成しているに過ぎない。しかし、それは問題の根源のひとつでもあるだろう。Cさんは問題を解決するのではなく、話を聞き、一緒に向き合うことで、相手の心が軽くなることを感じ、そこに意義を見出している。それはレストランの基盤である「儲け」には

つながらないが、レストランが誰にでも開かれた場であるからこそ、そういう場となるのであり、その場を提供していることがレストランを開いて良かったと思える瞬間でもあると言う。在日ビルマ人にとって頼りになる存在としてのビルマレストランは、2011年3月11日の東日本大震災の際には、具体的な情報を知らせる発信地としての役割も担ったという。

- C 地震の時は色々考えたねー、入管行ってリエントリービザもらって帰った人と電話で話したり、学生さんはビルマに帰ったけど難民の人たちは帰れない、帰れないでこれ(原発の被害)がもっと大きくなったらどうしようとか色々考えて、みんなからも電話が来て「どうしますか?」って、ニュースを見ても分からない人も多い、だから主人は一生懸命、毎日テレビとインターネットでニュースを見て日本語、英語からビルマ語を書いて、毎日みんなにこういう状況、明日はこうって知らせて、みんなはそれを見て「ありがとう」って

Cさんの夫は、ビルマで新聞記者をしていた経験があり、日本でも在日ビルマ人向けの情報誌を発行している。東日本大震災発生時にビルマ人への情報発信基地としての役割を担ったのは、そのような背景も手伝っているだろう。同時に、日々のレストラン営業を通して在日ビルマ人の困難や言語の問題に接しているからこそ、緊急時にどのような情報が必要かを判断し、「みんな」に感謝される情報提供を行えたとも考えられる。また、日常の語りにはあまり出てこない在留資格による立場の違いが、大災害に直面した際の語りで表出している。Cさんのレストランに持ち込まれる在日ビルマ人の課題には、難民としての困難も少なからず含まれているだろう。

一方、カチン民族のDさんはレストランの役割というよりも、在日ビルマ人の「先輩として」色々なアドバイスをしていると言う。

- D ミャンマーの方は日本語分からないし、区役所にどうやって行くか、どういう風に話したらいいかって分からないから、僕は先輩として教えるんです、税金のこととか、お店をやっている人たちはだいたい分かるんですけど一般の人たちは分からないみたい、僕も実際、昔は知らなくて

前の先輩たちから聞いて分かるようになったんですね、相談したいって来て、店が暇なときはその場で話しますが、特別ゆっくり話したいときは、日にちを選んで(ランチタイム後の)休憩時間に来てもらう、日本の方も結構いらっちゃって、ミャンマーに行きたいんですけど、ミャンマー人に話しかけたこともないから、向こうの人たちにどういう挨拶をするか、食事をするときに、どういう食べ方にした方がいいかって文化的な相談をする人も結構多い、あとミャンマーの方によく教えるのは、日本人のお客さんを連れていらっちゃったら座る場所を教えたりするんです、「そっち(上座)は、社長さんや店長さんが座る場所ですよ」って、「あなたたちはこの辺(下座)に座りなさい」とか、そうすると「えー全然知りませんでしたー」って日本の文化とか習慣のことをちょっと教えたりするんです

Dさんの語りには、ビルマ人、日本人、ビルマ人と日本人混合のグループという3つの異なる対象者への助言の例が挙げられていて興味深い。ランチタイム後の休憩時間は、ランチタイムの片づけや店内の清掃、食材の買い出しやディナーの仕込みなど、仕事はいくらでもあるのだが、その時間を割いて相談にのっているということである。周りの人を気にせず、ゆっくりと話ができる時空間でもあるのだろう。また、ビルマ人の食事の仕方を日本人に教え、日本の接待のマナーをビルマ人に教えるという双方向性も伺える。食事をするレストランであるからこそ、挨拶の仕方や食べ方を実際にやってみたり、座る位置を変えたりと、まさにレストランがロールプレイやシミュレーション練習の場となっているようである。

4-4 ビルマレストランにおける言語管理とエンパワメント

以上、名づけ、店舗の言語景観を構成する看板やメニューの作成、言語問題の対処の3つの場面における言語管理の語りに、どのようにエンパワメント(またはディスエンパワメント)の諸相が確認されるかに注目しながら分析を試みた。最も強く自己効力感が伴い、レストランを経営する意義にまでつながっているのが、ビルマ人や日本人客の言語問題に寄り添ったり、情報発信をしたり、

助言したり、異文化理解に貢献したりするプロセスであった。たとえ店主たちがビルマ人客の言語問題を直接解決することができなくても、傍に寄り添って座り、故郷の味で空腹を満たしながら話を聞くだけの行為であっても「コミュニティの役に立っている」というエンパワメントの感覚につながっている。いわばレストランに集う人のエンパワメントに寄与することが、他ならぬレストラン店主のエンパワメントにもつながっていると考えられるのである。そこには「先輩として」とか「ビルマ人が良くなることが私自身が良くなることなので」と言うように、レストランの経営者と客という関係性を一旦解消している語りもあるが、同時に「レストランなので入りやすい」、「実際に食前の挨拶や食事中のマナーをやってみながら」という風に、レストランという場であるからこそできる支援の形を生み出してもいるのである。

一方、名づけの段階での言語管理は、名づけを行う段階（すなわち開業時）という时期的な要因がもたらす不確実性の影響を少なからず受け、エンパワメントとの関係が弱まることが考えられる。つまり、これから始まるレストラン経営について、自分たちが想定する客層が妥当であり、彼らに効果的にメッセージを送ることができるのが不透明であるがゆえに逡巡せざるを得ないということである。ただしこれはどのレストランにとっても同じ状況のはずなので、それでもなお言語管理におけるエンパワメントの様相に違いを生む何らかの要因があるはずである。この調査からは、その要因を言語そのものの地位を意識化する経験の有無に見た。本調査において民族性を前面に出す店名をつけた店主は、本国で民族言語による教育を禁止されたり、民族名をはく奪された経験を持っている。ビルマで抑圧された状況に置かれたことについて、具体的な行動にうつしたかどうかは別として、不当なこととして異議申し立ての思いを持っていた。そういった言語意識が名づけにおいて、多くの人に通じるという汎用性よりも、民族としての自己表現を優先させる決意につながっていったと考えられるのである。

言語景観を構成する看板やメニューの作成段階においては、名づけや言語問題への対処とは質的に異なる言語とエンパワメントの関係が見て取れた。日本

語の読み書き能力だけではなく、ビルマやカチン、シャンの民族文化を日本文化の文脈に書き換える能力が求められるだけにメニューの作成には日本語と日本文化に精通していることが望ましい。日本人の協力を得ざるをえないことについて、コントロールを喪失していると感じるか、対等に共同作業を行っていると感じるかの違いは、エスニックコミュニティ内の言語維持活動とのつながりの有無に見出すことができた。移民の言語は日本社会で弱い立場におかれている。ビルマの少数言語についてはなおさらである。それにもかかわらず自信をもってシャン語やカチン語をメニューや看板に入れることができるのは、民族言語の価値認識と、話者数が少ないからこそ積極的に言語継承の担い手になろうとする「言語責任感」の表れと見ることもできるだろう。

看板やメニューの作成段階では経済面がエンパワメントの制約要素となることも忘れてはならない。これは見方を変えれば、言語景観の管理こそがエンパワメントの限界が生じやすい場面であることが明らかになったということでもある。今回「言語景観の言語管理」のデータを収集し分析に取り組んだことは、これまで別々であった研究分野を組み合わせる試みでもあった。方法論などの面では今後さらに検討していく必要があるが、両者を組み合わせることに意義があることは今回の調査で明らかとなったといえよう。

5. おわりに

本研究では、在日ビルマレストランの店主の視点から、言語管理とエンパワメントの諸相を見ることを試みた。在日ビルマ人は在日外国人のなかでも、来日の背景や日本での暮らしにより多くの困難を抱えるコミュニティであると言ってよいだろう。それでも店主の語りからは言語管理プロセスにエンパワメントの感覚が少なからず伴っている様子が見えがえた。このことからエスニックレストランの経営は「数少ない社会的上昇の経路」と言えるかは別として、移民言語マイノリティにとって「地域や社会、エスニックコミュニティの役に立っている」という自己効力の感覚を生む場を提供している可能性は高いと言えるだろう。ただし今回の調査参加者は、調査時点で経営が安定しているレスト

ランであることも忘れてはならない。レストラン A が開業した時にこの地域にあったビルマレストランはすでにすべて閉店してしまったという。その中には場所を移転したレストランもあるのだが、多くは経営が立ち行かなくなり閉店せざるを得なかったそうである。今後のエスニックビジネスの言語管理の研究においては、引き続き当事者の主観を問うことを主軸におきながらも、より大きな社会経済的文脈を考慮することも忘れてはならないだろう。

【謝辞】 本研究は調査に参加して下さったビルマレストランの経営者および従業員の方々のご協力なくしては実現できませんでした。ここに心より感謝の意を表します。